

一語の解釈の相違から Ⅱ

—伊勢物語第1・40・58・81段の解釈—

竹 岡 正 夫

本稿は下記拙論の続稿で、底本・引用書などすべて前稿のままである。

- 「一語の解釈の相違から —伊勢物語第85・86・90・91段の解釈—」（香川大学一般教育研究・第13号）

引用の漢文の返点・送仮名は印刷の都合上ここには省略する。

なお伊勢物語の解釈研究に、以下のような拙論がある。

- 「伊勢物語難語考四題」（川瀬一馬博士古稀記念論文集 未刊）
 ○「伊勢物語^{第2・21}_{24・62段}私解」（香川大学教育学部研究報告・第1部 第44号）
 ○「清むか濁るか—伊勢物語第111・114段の解釈をめぐる—」（投稿中）
 ○「伊勢物語^{第18・22}_{27・61段}私解」（香川大学教育学部研究報告・第1部 第46号）

1 いちはやきみやび

有名な第1段「^{うひかうぶり}初冠」の段の末尾に、

むかし人は、かく、いちはやきみやびをなんしける。

とあり、この中の「いちはやき」について今日一般に次のように解している。

- 「いちはやし」の語源は「いち+はやし」と考えられる。「いち」は「いちじるし」の「いち」と同じく、「いた」「いと」と同語源で、「甚だしく」の意、また「はやし」は「烈しい」の意と見るのである。従って「いちはやし」は「非常に烈しい」の意となる。「いちはやし」は中古の歌文に用例があるが、何れもこの意味で通ずるようである。（大系）
- すばやく機会をのがさぬ風雅なふるまい。（文庫）
- はげしい。勢いのよいさまをいう。〈口訳〉こんなにも熱情をこめた、風雅な^{ふるまい}振舞をしたのである。（全集）
- はげしい優雅なふるまい。「いちはやし」は「愚見抄」に、「人の性の急に思ひのどめぬをば、いちはやきといふなり」、「私記」に「今のいちはやぶる、又は、ちはやぶると同じで、非常に勢ひのはげしい様子をいふ語」、築島裕氏は「劇烈・困難・峻峻などの意」（解釈・第1巻第8号）などというように、勢ひのはげしいさまをいう。

「みやび」は「宮び」で、「鄙^ひび」「埴^まび」に対する語であり、優雅なふるまいをいう。みやびは伊勢物語の基調をなすものであるが、その内容については諸説がある。すなわち「媚たることにや」（奥義抄）、「そへなまめかしきすがたにこそ」（袖中抄・巻5）、「ゆうゑんにけさうずるをいふ」（惟清抄・愚見抄・闕疑抄）、「なさけをかはす心也。定家卿註也」（尚聞抄）、「何にても風流なる事」（古意）、「柔軟な心や細かい感情のかけろいを抛りどころとして、ひそかに相手の心の底まで下り立ち、そのままそっといたわっておくやさしさと、愛することにおいて断じて躊躇うことなく、同時に愛なき交わりを拒否する強さを併せ持つもの」（今井源衛氏・日本文学・第58号）、「風流事、具体的には、優雅な女性を発見して魅惑された、その感受性の豊かさ、そのまどう心地を和歌に表白すること、狩衣の裾を切ってやったということ」（上坂評解）などである。「みやび」とは、美しいもの（広義）・真実なるものを契機として行われる優雅なふるまいをいう。……第1段においては、男が自分の着ていた狩衣の裾を切って歌を書いてやったというふるまいが、「いちはやきみやび」であった。（全釈）

- 平安時代における「みやび」という語の用法と「みやび」にあてられた漢字（竹岡云、名義抄に「閑」の字を当てている）の用例を考えると、「みやび」とは、俗塵、すなわち宮廷の官僚としての生活から超越し、自由に時を過ごし、美しいものを美しいものとして追求してやまぬ「精神的自由」を言うと思えるべきだと思う。さて、この段の「みやび」に戻るが、諸注はおおむね二つの説に大別される。第一は、巧みに情景に適合した本歌取りの歌を表現し伝達した手順を「みやび」と称したのだとする説である。恋愛の場に限らず、その場に適合し、かつみずからの思いを的確に表現できぬようでは「みやび」と言えないのは当然だが、この説だと「いちはやき」という連体修飾語が続かないのではないか。「いちはやし」は「劇烈」「峻峻」「困難」などの字があてられるように（築島裕『解釈』1-8）、むしろ「若さを秘めた烈しさ」を表すものと見なければならぬ。手練手管ではないのである。もう一つは、「みやび」を「好色事」と解する説である。……しかし、前述のごとく「みやび」を俗塵から超越して自由に時を過ごし、美しいものを美しいものとして追求してやまぬ精神的自由として把握するならば、「好色事」も結果的にその内容の一部に含まれてしまうというほかはないのである。……すべてを忘れ、すぐさま着ていた狩衣の裾を切って歌を書いて贈った行動、貴族の日常生活、宮廷生活の体制からはみだしたその行動を「いちはやきみやび」だと言っているのである。（鑑賞）

○はげしい風流（集成）

以上の説明はいずれも「いちはやし」を「烈しい」と解し、その上に解釈を展開しているのであるが、例えば「はげしい風流」など具体的にどういふことを言うのか納得しかねる。

「いちはやし」の用例は、伊勢物語ではこの1例しかないが、他に次のよう

な例がある。

- ◇浦神^{イナハヤシ}蔽忌(欽明紀・5年12月、寛文版訓)
- ◇平仲、憎からず思ふ若き女を、妻のもとにみてきて置きたりけり。憎げなることどもを言ひて、妻つひに追ひ出だしけり。この妻に従ふにやありけむ、らうたしと思ひながらえとどめず。いちはやく言ひければ、近くだにえ寄らで、四尺の屏風によりかかりて立てりて言ひける、(大和・64段。大系注「妻がきびしくいうので」)
- ◇真言院の律師一人、いちはやく読む、いと尊し。(宇津保・国談・下)
- ◇この時過ぎたる鶯の、鳴き鳴きて、木の立ち枯らしに、「ひとく、ひとく」とのみいちはやく言ふにぞ、簾おろしつべくおぼゆる。(蜻蛉・中・天禄2年)
- ◇暗う家に帰りて、うち寝たるほどに、門いちはやくたたたく。胸うちつぶれてさめたれば、思ひの外にさなりけり。(同・下・天禄3年)
- ◇蟬の声いとしげうなりにたるを、おぼつかなうて、まだ耳をやしなはぬ翁ありけり。庭掃くとて箒を持ちて木の下に立てるほどに、にはかにいちはやう鳴きたれば、おどろきて、(同)
- ◇みれば、『この月、日あしかりけり。月たちて』となん、曆御覧じて、ただ今ものたまはする」などぞ書いたる。いとあやしう、いちはやき曆にもあるかな、なでふことなり、よもあらじ、この文書く人のそら言ならんと思ふ。(同・下・天延2年。大系注「気の早い曆だこと。」)
- ◇なほここにはいといちはやき心地すれば、思ひかくることもなきを、……「かくなん侍める、いちはやかりける曆は不定なりとは、さればこそ聞こえさせしか」とものしたれば、返り事もなくて、(同)
- ◇院の、おはしましつる世こそ、はゞかり給ひつれ、後の御心いちはやくて、「かたがた、おぼしつめたる事どもの報いせん」とおぼすべかめり。(源氏・賢木。大系注「性質が、性急で激しいので」)
- ◇いちはやき世の、いと恐ろしう侍るなり。かかる御事を見給ふるにつけても、命長きは、心憂く思ひ給へらるゝ、世の末にも侍るかな。(同・須磨。大系注「す早い世間の噂(蔭口)が」)
- ◇(源氏ノ恩ヲ)思ひ知らぬにはあらねど、さしあたりて、いちはやき世を、思ひはゞかりて、参り寄る人もなし。(同。大系注「容赦もない、烈しくきびしい(いち早き)時の勢一弘徽殿太后(右大臣一派)の権勢を気がねして」)
- ◇この中納言に「御賀のほど、よろこび加へん」とおぼしめして、にはかに(右大将ニ)なさせ給ひつ。院も、よろこび聞こえさせ給ふものから、「いと、かく、にはかに、余る喜びをなん、いちはやき心地し侍る」と、卑下し申し給ふ。(同・若菜上。大系注「早過ぎる気が致しまする」)
- ◇苦しげなるもの……こはき物のけにあづかりたる験者。験だにいちはやからばよかるべきを、さしもあらず、さすがに人笑はれならじと念ずる、いと苦しげなり。(枕・157段。大系注「早速現われるなら」)

辞書では次のように説明している。

- （「いち」は、程度のはなはだしいことを示す接頭語で「いた・いつ」などと同源か。「逸」は当て字。「はやし」は激しい意）☐程度のはなはだしく激しいさま。①靈威が激しく恐ろしい。荒々しくすさまじい。（上掲の欽明紀、その他の例、略）②きびしく容赦がない。てきびしい。激しい。（伊勢物語のこの例、上掲蜻蛉・天禄3年、源氏・須磨の例、略）③気性が激しい。気が強い。（上掲源氏・賢木の例、略）*今鏡一六・弓の音「よき上達部にておはしけるに、あまりいちはやくて、世のものいひにてぞおはしける」☐（速度、時間の）きわめて速いさま。①迅速、機敏である。速度が速い。（上掲宇津保・国譲、その他の例、略）②気が早い。性急だ。すばやい。（上掲蜻蛉・天延2年の例、略）*増鏡一・おどろの下「いまだ御五十日だにきこしめさぬに、いちはやき御もてなし、めづらかなり」（日本国語大辞典。以下略称「国語」）
- 《イチはイツ（神威・靈威）の転。神威が、さっと恐ろしくはたらくのが古い意味。転じて、とっさに手向いのできないような激しい力がはたらき、反応がさっと現われ、恐ろしく、不安に感じられる意》（下略）（岩波古語辞典）

以上から帰納して考えるのに、ここでは男が美しい姉妹をかいま見るや、自分の心をどめられずに直ちにすばやく反応を示して、歌を書こうにも紙がないのですぐさま着ている狩衣の裾を切って紙の代わりとし、歌もたまたま狩衣の模様が紫色のしのぶ摺りであったので即座にそれに合わせて、

かすがの ム わかむらさき (注1) の すり衣 しのぶ (注2) のみだれ (注3)
かぎりしられず

と効果的に詠みこんで、自分の恋情をもみごとに託し寄せ、それも悠長な散らし書きなどしている余裕もないので、すらすらと「追ひ継ぎて」(注4) 続け書きにし、又それに付ける花の枝などもないものだから「わかむらさきのすり衣」で代用して、あつという間に物の見事に恋歌を書き上げて姉妹に贈った、その場に機敏にきびきびと、てきめんに応じた敏捷な反応ぶりを「いちはやき」と言っていると解される。上掲の諸例もすべてこの意味で一貫して解ける。

「みやび」とは、

- 優雅であること。風流なこと。宮づの名詞形。「あしひきの山にし居れば風流なみ吾がするわざを咎め給ふな」(万721)「天皇風姿岐嶷」(綏靖前紀)「斐然之藻、忽形於言」(継体紀7年)「麻呂等少而閑雅寡欲」(持統紀3年) [考] ミヤビは、ミヤブ・ミヤビカなどとあわせて、閑雅・都会風・文化的・ものの情趣を解するな

ど、多くの内容もち、華美にはしらず、素朴でもなく、むしろ、その中間の洗練された情趣的な、美的理念といえる。第2例の「風姿」は、懐風藻の「風範・風骨・風鑿」などの「風」（風采）の意に近い。（時代別国語大辞典・上代編。以下略称「時代別」）

- ①宮廷風で上品なこと。都会風であること。また、そのさま。洗練された風雅。優美。*書紀-継体7年8月（前田本訓）「是に、月の夜に清談して、不覺に天曉けぬ。斐然あまつくるとやせ藻、忽に言に形る」*神楽歌-大宜「〈本〉若き我は、美哉もとのかたり斐おろかも知らず 父が方母が方とも 神ぞ知るらむ」*源氏-東屋「寂しう事うちあはぬみやび好める人の果て果ては、物清くもなく」 ②恋の情趣を解し、洗練された恋のふるまいをすること。（伊勢物語のここの例、略） ③すぐれた風采。りっぱな姿。*書紀-仁徳前（前田本訓）「大王は風姿 岐 巖さか」（国語）

と説明されている。このような貴族ふうの洗練された風雅な振舞いなどは当時そう容易に身につくものではなかった。ところが、この主人公の男は元服したばかりの時からすでに上述したような「みやび」たる振舞いを、しかも立派に「いちはやく」やってのけたわけで、現代の若者なんかではとても事だと、物語手が評しているのである。

(注)

- 1 当時「わかむらさき」は次の2種の意に用いられていた。

(A) 紫色の意味

- ◇武蔵野に色や通へる藤の花わかむらさきに染めて見ゆらむ（延喜13年・亭子院歌合）
- ◇秋深み野への草葉は老いぬれどわかむらさきを今は頼まむ（宇津保・吹上・上。ここでは衣の色を言い、位を望んでいる）
- ◇藤波のかかれる岸の松は老いてわかむらさきにかで咲くらむ（源順集）
- ◇葉がへせぬ老木の松に色めくやわかむらさきの藤波の花（千五百番歌合・顕昭）

(B) 紫草の意味

- ◇武蔵野は袖ひつばかり分けしかどわかむらさきは尋ねわびにき（後撰・雑二・1178、よみ人知らず）
- ◇まだきから思ひ濃き色に染めむとやわかむらさきの根を尋ぬらむ（同・雑四・1278、同）
- ◇武蔵野の草のゆかりに藤袴わかむらさきに添へて匂へる（元真集）
- ◇むさし野にこれもむつまじ女郎花わかむらさきの故ならねども（千五百番・公継）

古今和歌集には、次のような歌がある。

- ◇恋しくは下にを思へ 紫の根摺の衣 色に出づな ゆめ（恋三・652、よみ人

しらず)

『臆断』にはなお次のような例をあげる。

◇ 宇多法皇、春日社にまうで給ふ時、大和守忠房がよみて奉れる廿首の哥の中に、

ことしよりにほひそむなるかすが野の若紫に手なふれそも

紫に手もこそふるれ春日野の野守よ人にわかなつますな

きのふ見ししのぶのみだれたれならん心のうちぞかぎりしられぬ 顯 輔

2 この「しのぶ」については今日次のように両解があり、定説がない。

○しのぶ摺りの紋形の乱れを、恋い慕い乱れる心の意にかける。(全集)

○「信夫摺りの乱れ模様」と「心に忍ぶ乱れ」とを懸けたもの。〈口訳〉私の心のひそかな乱れは、(集成)

「偲ぶ」とは、

○慕う。偲ぶ。何かの縁にふれて身近にないものことに思いをはせる。「鏡なすあが思ふ妻ありと言はばこそよ家にも行かめ国をも斯怒波め」(記允恭)(下略)(時代別)

の意であり、すればこの一首も「若紫の摺衣」を縁として紫色のようにゆかしい二人の姉妹を「しのぶ」の意味である。即ち、

春日野の若紫(の根)で染めたこの摺衣のしのぶ染めの模様の乱れは、その果ても知れない——紫の色のように美しいお二人のお姿がすっかり染め着いた私のこの心は、お二人を恋い慕うて果てもなくただ乱れに乱れています。

「忍ぶ」の語は古今和歌集の恋の歌では次の2種の用法がある。

(A) 自分の恋情を、相手に知られることを憚ったりなどして、表面に現わさぬように心中に秘め、こらえているの意味

◇思ふには忍ぶる事ぞ負けにける色には出でじと思ひしものを (恋一・503、詠み人知らず)

(B) 二人の恋仲を周囲や世間の人に知られまいと、その恋情を心中に秘め表面に現わさず、人目を忍んで逢ったりしている意味

◇みちのくの安達の真弓わが引かば末さへ寄り来しのびしのびに (大歌所御歌・1078)

ここでは、(A)に解すれば、恋情を歌ったこの歌を相手に贈っているのと矛盾する。(B)はまだ時期が早すぎる。したがって「忍ぶ」の意ではなく、「偲ぶ」の意に解するのが妥当ということになる。

3 「みだれ」は、表面では「しのぶ摺りの乱れ模様」をいうが、裏では、

○柳・葦・こも・菅・稻・尾・髪・緒・解衣など糸状をなすものについていうことが多い。(時代別)

ゆえに、次の例のように、

◇白露と秋の萩とは恋乱別くことかたきわが心かも (万葉・2171)

◇いかなりしふしにか糸の乱れけむしひて繰れども解けず見ゆるは（後撰・雑二・1163）

◇ ある所の、春と秋といづれまされると問はせ給ひけるに、詠みて奉れる、春秋に思ひ乱れて別きかねつ時につけつつ移る心は（貫之集・822）

◇めでたくも、くちをしようも、思ひ乱るるにも、なほ夜べの人ぞねたく憎まほしき。（枕・184段「宮に初めて参りたるころ」）

などのように、「わくことかたき」「解けず見ゆる」ものであり、「春・秋」のいづれにしようかと「別きかね」るものであり、又「めでたく」思う心と「くちをしよう」思う心とが交錯しあっていることである。従ってここも単に、恋のための心の乱れ、と言ひ換えただけでは解釈にならない。一人の美女だけでも恋慕の情はああしたものか、こうしたものか東ねかねるほどに乱れるものなのに、まして美女二人とあっては、そのうちのいづれにしようかと「思ひ乱れわきかね」て、いよいよ「限り知られ」ぬ状態に陥るわけである。まさに恋情の乱れの倍増を「限り知られず」と言っているのであって、諸注このところがなお十分具体的に解けているとは言いがたいようである。

4 「をいつきて」については、『全釈』の説が正しい。

○続け書きにして。底本に「をいつきて」とあるが、底本の表記例からみて「おひつきて」が正しく、老人ぶって、おとなぶっての意ではない。「おひつきて」の意には、(1) (女が狩する男に) 追いついて（直解・惟清抄）、(2) すぐに（臆断・新釈など）、(3) (姉妹のひとりひとりに) あいついで（後藤利雄氏・国文学・第4巻第8号）、(4) (前の後朝の歌一省略されている一に) ひき続いて（折口ノート編）、などの諸説があるが、「おひつきて」のかかる「いひやる」（伊勢物語に19例ある）は、歌を書いて相手にやることを意味するから、「おひつきて」は歌の書き様をあらわすのであろう。こういう類例は「詳解」に引く源氏物語の「陸奥紙に追ひつぎ書き給ひて、まうけの物ども、こまやかに縫ひなどもせざりける、色々おし巻きなどしつつ」（総角）がある。追ひつぎ書は「ちらしなどもせざるなり」（細流抄）、「追継なり。先のくだりを追ひて、おなじさまにつづけてかくといへり」（源氏物語玉の小櫛）とあるように、字を散らし書きにしないで、続け書きにすることをいう。ここの「おひつきて」も「おひつぎて」で、続け書きすることをいうのであろう。（全釈）

「老いづきて」などと解するよりも、「追ひ継ぎて」と解して始めて「いちはやき」さまざま具体的に了解できるのである。

近代の注釈界では、学問的に確かな根拠をあげての新説が出されても、それ以後出された注釈は全く何らの反論の根拠もあげずにそれを完全に無視し去って相変わらず非学問的・思いつきの旧説を墨守したがる悪弊がある。森本氏のこの説は（実は『大成』も触れていたが）すでに昭和44年の『伊勢物語論』、48年の『全釈』に公表されているのに、それ以後公刊された諸注釈はいずれも無視して、中には砂上の楼閣の伊勢物語論を展開しているものさえある。かくて、伊勢物語・古今和歌集等の解釈は江戸時代から一歩も出ていないというケ

ースが多いのも、けだし当然であろう。拙著『古今全評釈』上・下（昭和51年刊）も、その後の『集成』版古今和歌集（同53年刊）では、わけもなく無視されている。

2 いでゝいなば

昔、わかき^(を)おとこ、けしうはあらぬ女を思ひけり。さかしらするおやありて、「思ひもぞつく」とて、この女をほかへ^(お)をひやらむとす。さこそいへ、まだ^(おひ)をいやらず。人のこなれば、まだ心いきおひ^(ほ)なかりければ、とどむる^(注1)いきおひなし。女も、いやしければ、すまふちからなし。さるあひだに、おもひは、いよまさりにまさる。にはかに、おや、この女を^(を)ひうつ^(血)^(注2)。おとこ、ちのなみだをながせども、とどむるよしなし。あていで^(を)ゝ、いぬ。おとこ、なく^(わかれ)ゝよめる、

いでゝいなば 誰か 別のかたからん ありしにまさるけふは かなしも

とよみて、たえいりにけり。（下略）（第40段）

親の反対で恋人と結婚ができずに煩悶する若い男の、昔も今も変わらぬ悲恋物語である。

この段の歌の初句「いでゝいなば」の意味がうまく通じないというので、次のように種々説かれている。

- いでゝゆくに、わづらひなくは、たれかわかれんことのかたかるべき。ほかへいなぬほどはあはねども、なをざりにかなしかりしを、いぬる日になれば、ありし思は数にもあらぬとよめる也。（愚見抄）
- 此女をおひいださば、われも又この世に跡をとどめまじきほどに、吾もわかるべければ、かたからずと也。（直解）
- 女をよそへやるなり。されば、女のよそへゆくも子細なし、我も此世にあとをとどむまじき程に、前のかたきといふ事も有まじき也。（闕疑抄）
- 六帖には初の五もじ「いとひても」と有。…君が出ていなば誰か別のかたからん。我も世に有へんことあるまじければ、ともにわかるべし。さきざきは猶ざりともまたのむかた有しを、ありしにまさりてかなしきはけふなりとよめり。二三の句、心あまれるにや。（臆断）
- 今のかな本に「いでゝいなば」とあるは、さらに聞えず。これはさきの段なる「出ていなば限りなるべし」と云哥のはじめを見まがへて、ふとかきあやまりたるものなるべし。（新釈）

- 解けない。「女が出ていつてしまうなら、私もこの世に生き残らぬつもりだから、誰も別れがむづかしいなどということはないであろう。さてもさても今までにまさるつらい目にあう今日はかなしいことだなア」と姑く解いておく。(松尾新註)
- 解しにくい。塗籠本等に「いとひては」とある。自分勝手に出て行ったならば、と解しておくか。(精講)
- 女が出て行ったならば、私も死んでしまうつもりだから、別れはたやすい事だ、以前はまだ前途に望みがあったけれど、今はもはや絶望だ。(大系)
- 自分から女が去ってゆくのなら、こんなに別れがたくも思わないだろう。無理に連れ去られるのだから。(全集)
- 女が自分から出て行ったのなら、誰だって別れをつらいとは思わないだろう。しかし、追い出されたのだから、以前よりいっそう今日は悲しいことよ。……この一首だけ独立させると、意味の分からぬ歌である。(全釈)
- 諸説があってめんどろな歌だ。「女が出て行ったら私も死んでしまうつもりだから、別れはたやすい」「私もいっしょに家を出られたら悲しい別れもしなくてすむ」等の解もあるがとらない。ここに至るまでの事態の進展ぶり、特に「おひうつ」「ゐていでいぬ」などの強制的な手段を表わす表現との関連から、その対比において「いでいなば」に女の自発的意志の場合の仮想をみたい。〈口訳〉意志に反して追い出されるのではなく、自分から女が出ていってしまうのなら、それはそれであきらめがつくから、誰も、悲しいとはいえ、特に別れるのがつらいということもないかもしれない。でも、あの人はむりやりつれ去られてしまった。つらいながらもとにかく家にいた今までにくらべて、今日はいっそう悲しいことだ。(文庫)

以上のように特に近代の注釈は『臆断』などの影響であろうか、「出づ」を自動詞と固く信じて疑わない。しかしダ行下二段の「出づ」には自動詞としての用法もあるが、当時このままの形で同時に他動詞の用法もあったのである。

- ②出す。①に対して他動詞として用いる。「言に伊泥て言はばゆゆしみ」(万4008)「紅の色にな出そ思ひ死ぬとも」(万683)……「剣刀鞘ゆ抜き出て伊香胡山」(万3240) (下略) (時代別)
- ②≪他動詞として≫…①あらわす。(用例、万4008) ②生み出す。「一万恒沙の宝をいづべき木なり」〈宇津保俊盛〉 ③外に出す。「かかる道に率て、いで奉るべきかは(オ出シスベキデナイ)」〈源氏夕顔〉(岩波古語辞典)

ここは前の地の文中にある「この女を逐ひうつ」「率て出でて、去ぬ」を受けて言っているのであって、つまり親が二人の恋仲を裂いて、この家の中から無理やりに女を連れ出して追放し、よそへ去って行ってしまうの意である。

「いなば」の仮定は上句を一般的に言っているからである。いま一首を誤解の生じないよう語句を補って訳しておく。

(そんなふうに二人の仲を引き裂いて、無理やりに女を) この家から連れ出して、よそへ去って行くなら、一体どこの誰が別れにくいことなんかあろうかよ(誰だって簡単に別れられるさ)。今までも随分ひどい仕打ちだったがそれ以上にひどくむごい今日という今日は、悲痛だなあ、もう。

無論、地の文の「あて出^てて」も同じく他動詞である。

(注)

1 「とどむる」について、

○親の処置を中止させる意とも、出されて行く女を引留める意とも解せるが、前者も結局は女を引留めることに他ならない。(上坂評解)

のように説くものもあるが、「とどむ」はその場に引きとどめる意であり、「とむ」は中止させるの意であって、当時区別されていた(『古今全評釈・上』830ページ参照)。

2 「をひうつ」は正しくは「おひうつ」。

◇逐 ^{オ・ヒ・ウツ} (名義抄。大慈恩寺三藏法師伝・承久四年点・四にも)

3 心づきて

むかし、心づきて色ごのみなるおとこ、ながをかといふ所に、家つくり
てをりけり。(下略) (第58段)

この「心づきて」の解が明確でなく、諸注「心づきて」と読んで、次のように解く。

○センスがあって。(校注)

○心をつくして。(色好みに)執著している。おとなになる、ととる解もある。(精講)

○「気がきいて」「情愛があって」「色好みの心がついて」「おとなになって」「心を尽して熱心に」等の意識が試みられている。「心づきなし」に対する「心づきあり」は「宇津保物語」にもみえ、思慮深さがある、気がきいている等になろうが、ここは<心+四段つく>で異なる。また、「世心^{よごころ}つく」等と軽く同一視するのも、おとなになる、色好みの心がつく等も存疑。心を尽しても、<心尽きて>とみるわけだがどうか。「源氏物語」などでは、好意を持つ、関心を持つの意によく使用。(文庫)

○洗練された心の持主で(集成)

塗籠本では「こころづき、なまいろごのみなる男」(読み方は『全書』のま

ま)となっており、これについて、

○流布本には「心づきて」、真名本には「榮而」とあるのを、古意によ^よづ^づき^きてと訓んでゐるのは皆わるいと云つて、新釈本に「心つきなき」として塗本にしたがふと書いてあるが、塗籠本には「心つきなま色ごのみなる男」とある。「き」と「ま」とは字形も似てゐるから、「き」の誤写と推断して、新釈に「心つきなき」としたのであらうが、……専断ではあるが、この考へが一番勝れてゐる。愚見抄に、心^こづ^づくとは、人のおとなになるをいへりと解いたのは、勿論拙劣で、肖聞抄に、好色に心をつくしたる事也。惟清抄に、物おもひに心を尽したるなり。臆断に、好色の心づきてなり。とある諸注、いづれも賛成しがたい。塗籠本のまゝに、「心つき、なま色好みなる男」として、解せられないこともないが、まづ新釈本に従うて解くことにする(大成)

のごとく本文を都合よく変改してしまうのも、よく行われる方法だが、軽々には従うわけにはいかない。源氏物語に見えると『文庫』が言っているのは、いずれも「心づきなし」で、ここには直接の資料にならぬ。

この語の確かな用例は次のようである。

- ◇くら人ありはらのしげ家、心づきたる人にて、かしこくおどろきて(宇津保・忠こそ。大系注「しっかりした人。心が浮いているの反対」。竹岡云、おそらく「心着き」と解しての解釈だろうが、根拠なし。以下も同じ)
- ◇かみなびのたねまつといふ長者、限なききよらの王にて、唯今国のまつりごと人にて、かたち清げにて、心づきてあり。(同・吹上・上。大系注「気がつく人で」)
- ◇開情 コ、ロツキ(図書寮本名義抄)
- ◇開懐 = 心^こづ^づき^きナリ(観智院本名義抄)
- ◇開情 コ、ロツキ(同)
- ◇心付 = 見^みエム人 = 見合^{みあ}ハバ(今昔・28・1。大系注「名義抄、『開情』をコ、ロツキとよみ、遊仙窟、真福寺本・同醍醐寺本に『開情』を『開情トコ、ロツキナリ(ナルコト)』とよむ(名義抄の『開懐=心づきナリ』は、右の文選読みの譌か)。すっかり打ちつけて気を許すことのできる意から、茲では、我が意に叶って見える人らしくお会いできたらの意。』

かくて上記今昔の大系注に従うのが妥当であると考えられる。さらに今日の口語で言えば、気のおけない、気さくな、といった意の語で、名義抄の声点に従い「心づきて」と濁音に読むべきである。この一段に展開する以下の話から見ても、いかにも「心づき」な男であることが具体的に了解されよう。

なお、『色葉字類抄』に、

- ◇營 コ、ロツク 桑門誰不一是也。

とある「ころつく」は、

◇母なむあてなる人に心つけたりける。(第10段)

◇良清が領じて言ひしけしきも、めざましう、年ごろ心つけてあらむを、目の前に思ひたがへむもいとほしうおぼしめぐらされて、(源氏・明石)

と同じ語であって、この「心づき」とは意を異にする。

4 だいしき

有名な左大臣源融の河原院で、「菊の花うつろひさかりなるに、もみぢのちくさに見ゆる折」に親王達を招待して宴を設け、一同「この殿のおもしろきをほむる歌」を詠んだ。その中の、

そこにありけるかた^(お)めをきな、だいしきのしたにはひありきて、人にみなよませはてし、よめる、

しほがまに いつかきにけむ あさなぎに つりするふねは こゝに
よらん (下略) (第81段)

とある「だいしき」が難解で、古くは、

○天福年中の本には「たいしきの下」と有也。武田氏所持の定家卿自筆の本に、こゝをすりて「いたしき」となほせり。然ば、もとは「たいしき」と有しか。舞台などのやうなるをいふか。こゝに板じきの下といふは、親王又は上達部のしたにありといふ心也。只末座には有儀也。(直解)

○舞台^{ぶたい}などのやうなるものをいふと堯孝^{げうかう}の説也。ひらはりのやうなる物か、別には見えず。只広縁^{ひろえん}などゝ心得てをくべしと、御説なり。(闕疑抄)

のように説かれていたのに、『新釈』が「いたじき」として解して以後、おおむねそれに従って解釈している。

○板じきのしも 「しも」とは高尚が考てあらためたる也。こは、もと、文字に「下」とかきたるを「した」とよみあやまりたる人のかなに「した」とかきなせるをうつし伝へたるものなるべし。「した」にてはかなはず。かならず「しも」とあるべき也。北山抄二の巻に「弁少納言起座立小板敷下」とあるにても思ふべし。「した」には、たゞれず。…板敷^{いとか}の下とは板敷^{いとか}より下^{した}のかたにて、地上をいへり。北山抄に「立小板敷^{たていとか}下」とあるも地上なり。かたる翁といへるからに、板敷^{いとか}よりも下^{した}の地上にはひありきてとはいへるなり。江家次第九の巻「射場始」の条に「自清涼殿広廂、経上戸小板敷并地上及下侍上、敷筵道〔以下割注。近代小板敷下堆砂為閣道、到下侍、

為御器』といへるにても思ふべし。板敷に堆砂すべしやは。板敷のしもの地上に人のゐる事、同巻に「先跪小板敷前地、依気色登之」とあるを例とすべし。(新釈)

○板じきは、床に畳がなくて、板ばかり敷いた所。庭より殿に上る板敷。「しも」とは、板敷の下の地上。……シタと云うても、板敷の直下の意でなく、板敷より低い所をシタと云ふので、地上を指したと見てさしつかへはない。(大成)

○板敷の間の下座しもぎにゐたのであらう。底本「たいしき」とあるが、諸本多く「いたしき」とあるのによつて改めた。(評解)

○「いたじき」はすのこ。縁側。(大系)

○寝殿造りの板敷ゆかの床から一段下つた所。(全書。塗籠本「いたじきのしたを」)

○原本は「たいしき」だが意味不通。諸本によつて「板敷いたじき」と改める。ここは縁がわの板敷。(文庫)

○板敷いたじきのした 縁側の下。底本は「たいしき」に作る。(集成)

ただし、中には「だいしき」のまま解そうとしている注釈も若干あるが、いずれも根拠をあげないのが弱い。

○「たいしきのしたに」は台敷の下に、で庭に降ること。庭に出て、の意。(研究)

○「だいしき」(台敷)は、諸本に「いたじき」(板敷)とあるが、……ここではいちおう底本のままとし、舞台のようなものとみておく。……「下した」は直下の意でなく、台敷から一段下つた地上をいうとみれば、これでよからう。(全釈)

「だいしき」は「台敷だいしき」で、「台」については次の説明が最も要領がよい。

○①土を方形に高くもりあげ、四方を展望できるようにしたもの。また、高殿。「楚王のだいの上の夜の琴の声」とずんじ給へるも」<源氏東屋>

竹岡補：◇臺 余雅注云、臺 徒来反、宇手奈 積土為之、所以觀望也。尚書注云、土高曰臺、有樹曰榭 和名宇天奈。(和名抄)

◇相思夕上松臺立 葦思蟬声滿耳秋 白 (和漢朗詠集・上「秋晚」・白氏文集13。

大系注「台は土を方形に高くもりあげて、四方を見はらせるようにしたものみの台。うてな。そこに松が植えてあった。)

②殿舎と殿舎の間にある、屋根のない、床張りの所。露台。「だいの前に植ゑられたりける牡丹のをかしきこと」<枕 143>

③物を載せる平たいものの総称。「その桶すゑたるだいなど、みな白きおほひしたり」<紫式部日記>。「篝火かがりびのだい」<源氏常夏>

④特に、食物を盛った器をのせる具。台盤。転じて、食事。「御だい八つ、例の御皿など、うるはしげにきよらにて」<源氏宿木>。「御だいなども参らぬにはあらで、なかなか常よりも物をいそがしう参りなどせさせ給ひけるに」<荣花初花>

⑤「台閣」の意で、尚書省などの役所をいうか。「常にだいの使として四方の貴き客まらひとあり」<今昔9.30>(岩波古語辞典)

ここは、下に「敷」が続いていることや、物語の情景から考えて、上記②の意味の「だい」と解される。「しき」は当時「板敷・うはしき・鞆しき・棧敷・布敷・折敷」（以上『新撰字鏡』『色葉字類抄』より）のように用いられている「敷」である。

身分の高い親王・上達部などは「台」の上に出て、広い河原院の庭園を見晴らしながら歌を詠んだのだが、この「かたる翁」は「台敷のした」に「はひありきて」詠んだというのである。

(補) 上記『岩波古語辞典』の②にあげる枕草子の「だい」（能因本「ろたひ」・三卷本「たい」）について、「露台は内裏にのみ存した」もので、貴族の邸にあったとは考えられず、枕草子のこの「たい」は「対」の意に解すべきだとする榊原邦彦氏の御説がある（「枕草子の『たい』『ろたひ』」『解釈』昭53・4）。しかし、平安初期、河原左大臣のような最高貴族の豪華な邸に、例えば次のような類の「台（露台）」がなかったとすべき確かな根拠もお見出しがたい。あえて私見を世に問う次第である。

◇臺頭有酒鶯呼客 水面無塵風洗池 白（和漢朗詠集・上・鶯。大系注「うてな。ここは水辺の^{だいしき}台樹で、宴会用の棧敷みたいなもの。」）

(1978・11・26)